

世界からみた日本を統合し、 日本からの日本学を発信する

国際日本学研究所 所長 小口 雅史



本研究所は、文部科学省21世紀COEプログラムに「日本発信の国際日本学の構築」が、文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業（学術フロンティア推進事業）に「日本学の総合的研究」が、同時に採択された2002年に設立されました。

これらのプログラムが終了した2007年からは、同じ学術フロンティア部門で、新プログラム「異文化研究としての日本学」が採択され、国際日本学の引き継ぎの構築に取り組んできました。このプログラムも成功裡に終了した後は、文部科学省による新たな私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（2010年度～2014年度）に、「国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討—〈日本意識〉の過去・現在・未来」が採択されました。本研究所では、右に詳しく紹介するように現在はこの事業を中心として研究活動を遂行しております。

さて本研究所設立以前にも、「日本学」なる研究分野はもちろん広く世界各地に存在しました。例えばドイツではJapanologieと呼ばれる学問分野です。つまり「日本学」そのものは外国産であって、ある言語圏で、日本の何らかの文化現象を対象に行われている学問研究が、その言語圏ですべてまとめて「日本学」の名で呼ばれてきましたし、それは今でも変わりません。そこには文学・哲学・社会学・政治学・人類学といった人間諸科学の多様な観点が共存しているのが普通です。このように「日本学」はもともと、それぞれの地域内で学際的に開かれた存在でした。そこでこのような各地での「日本学」を結びつけ、それらにさらに国際的性格を付与することで、「日本学」総体に新たなダイナミックな展開をもたらすことを目指して、法政大学の提唱の下に立ち上げられたのが「国際日本学」です。本研究所は設立当初から、この新しい研究分野である「国際日本学」の学問としての確立、あるいはメタサイエンスとしての「国際日本学」の確立に努めてきました。私以前に2代続けて哲学を専門とする研究者が所長の任に着いたのは、こうした経緯からすれば当然のことでありました。こうした試みは着実に成果をあげてきたと私どもは自負しております。またこれからは徐々に方法論の確立からさらに各分野の内実を具体化することへの転換が期待されているのだと思います。

世界各地における「日本学」は、日本の経済的地位の低下とともにかつての勢いは失われているとも言われています。こうした時代にあって、「国際日本学」は日本における日本研究の諸成果が、より活発に国際社会に発信されるものであって、世界各地での「日本学」の活性化、あるいは日本文化への新たな関心を喚起していくことに貢献できるはずで、「国際日本学」によって日本の各分野の専門の研究者が、一国主義の殻に閉じこもり、これまであまり交流を持たなかった海外の研究者と接して、「外から見た日本」というきわめて刺激的、文化的インパクトをうけ、それがまた日本人の日本研究にも反映していくという研究の好循環を期待しております。

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業への採択を受け、2010年度からの5カ年計画で「国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討—〈日本意識〉の過去・現在・未来」と題する研究を推進し、研究所が擁する主要な方法的リソースごとにテーマを以下の4つに分け、独自に研究を行う体制を取ってきました。2014年度は、これらの研究を統合する仕上げの年となります。

アプローチ① 「〈日本意識〉の変遷—古代から近世へ」

：日本文学、日本史学、日本思想史学

チームリーダー／小林 ふみ子（国際日本学研究所兼任所員、文学部教授）

アプローチ①では、日本の文献や図像などに表れた〈日本〉についての認識の変遷を歴史的にたどることを試んでいます。研究領域は文学、歴史学、地理学、思想史、美術史、比較文学・文化など人文諸学にわたります。東アジアのいわゆる華夷秩序のなかで形成された日本人の自国像は必ずしも一貫したのではなくしばしば矛盾するような多様な相貌を表し、また一定して意識されるのではなく、対外関係や災害などの危機意識の高まりによって一時的に強く表われ出てくるものです。そういった〈日本〉なるものを本質的で不変のものとして捉えることなく、いかにそれが歴史的に形成され、変容しているかを明らかにしようとするのがこの研究です。



▲ワークショップ「和の国? 武の国? 神の国!？」

アプローチ② 「近代の〈日本意識〉の成立—日本民俗学・民族学の問題」

：民俗学、民族学、文化人類学

チームリーダー／ヨーゼフ・クライナー（国際日本学研究所客員所員）

アプローチ②では、主に文化人類学（民族学・民俗学）、形質人類学、考古学が、各時代の〈日本意識〉の形成にどんな影響を与えたのかを検証しています。明治から昭和までの文化人類学の研究は重大ムーヴメントでありながら、これまで研究されていない問題が残されているのです。大正から昭和前期、または戦後の昭和40年にいたるまでの約50年間に起こったパラダイムの変化、言い換えると多民族国家の帝国日本から単一民俗国家の戦後日本への歴史的過程に起こった両みんぞくがくの学説の移り変わりに着目し、それを再検討しています。



▲国際シンポジウム「岡正雄—日本民族学の草分け」

アプローチ③ 「〈日本意識〉の現在—東アジアから」

：アジア学、日中文化論、異文化コミュニケーション学

チームリーダー／王 敏（国際日本学研究所専任所員、教授）

日本研究の国際交流が求められていますが、中韓だけにとどまらず、東アジア地域に広げて日本研究の集積に注目する必要があります。収集・分析が急がれる故、とりわけ月例研究会・東アジア文化研究会を2006年以来開催して内外の研究に直接触れることに努めるとともに、年間一冊の論文集を発刊してきています。継続した取り組みによって、欧米に



▲月1回開催している東アジア文化研究会

おける日本研究とは異なる、漢字文化圏の歴史的つながりなどが無視できないという現実が明らかになってきました。海外の研究機関とさらに連携した、多角的な交流のネットワークづくりが大切になっています。

アプローチ④ 「〈日本意識〉の三角測量—未来へ」

：国際日本学、文化人類学、哲学、社会学、宗教学

チームリーダー／安孫子 信（国際日本学研究所兼任所員、文学部教授）

アプローチ④では、哲学、社会学、宗教学といったいわばメタ・サイエンスの手法が用いられます。加えて、フランス・アルザス欧州日本学研究所を始め、海外の研究センターとの共同研究も行い、民族学で言う「三角測量」の方法も適用していきます。新しい〈日本意識〉の可能性を、このように、メタ・サイエンスの立場から学際的・国際的に問うなかで、とりわけ、先立つ3つのアプローチの成果を逐次、統括していつ、将来にあるべき〈日本意識〉の一つのまとまった像の提示を目指します。



▲国際シンポジウム「日本の国家アイデンティティの形成と土着性の変遷」

在欧博物館等保管日本仏教美術資料データベース (JBAE)

◆本研究所は、2010年、文部科学省が公募した「国際共同に基づく日本研究推進事業」において、「欧州の博物館等保管の日本仏教美術資料の悉皆調査とそれによる日本及び日本観の研究」というテーマでの研究が採択されました。

◆これは、在欧日本仏教美術を研究することによって、そこから欧州における日本観を抉り出そうという意欲的なものでした。この企画は2013年3月に終了し、日本学術振興会からはA評価をいただくなど、成功裡に終わりました。

◆その後も研究・データ蒐集は続けられており、これまでに集めた膨大なデータは、本研究所のサーバーを通じて公開されています。このデータベースには、原則として画像が添付され、研究上必要な詳細なデータが付されています。

◆これまで在欧日本仏教美術作品についてこれだけの規模で総合的に蒐集したデータベースはなく、世界でも唯一、法政大学国際日本学研究所だけに存在しています。今後、このデータベースが活用されて新しい研究が生まれていくことを期待しています。

また本研究所では、2014年度より、このデータベースを活用した研究論文に対して法政大学国際日本学研究所賞を創設する予定です。



▲在欧博物館等保管日本仏教美術資料データベース (JBAE) のホームページ <http://ateruii.hosei.ac.jp:8080/index.html>